

公衆衛生

THE JOURNAL OF PUBLIC HEALTH PRACTICE

映画の時間

9.11により改めて浮き上がった、米国社会に存在する民族・人種差別や偏見、公正な世界を願う人々の声を記録

コート イン ビトウィーン

Caught in Between

故郷を失った人びとの物語

- 監督・制作：リナ・ホシノ/25分/2004年/米/音声：英語(日本語字幕)、英語オリジナル版あり
- 作品公式HP(英語)<http://www.caughtinbetween.org/>日本での上映会、DVD情報等は<http://www.root-b.org/>(日本語サイト、DVD一般：個人視聴用2,500円、団体：上映用20,000円で販売中)

全世界に衝撃を与えた、2001年9月11日の米国同時多発テロ、その後の米国政府による「対テロ報復戦争」は、未だ終わりが見えない。9.11以降、米国ではテロとは関係のない多くのイスラム教徒たちが拘束され、迫害を受けた。それは60余年前の真珠湾攻撃後に米国在住日系人たちが受けた迫害の悪夢が甦ったようであった。本作品は、米国在住日系人が、自分たちが過去に受けた体験と重ね合わせて、イスラム系米国人たちとともに、民族・人種差別、偏見による人権侵害に対してあげた抗議の声を記録したものである。

作品は、日系・イスラム系住民に対するインタビュー、日系・イスラム系らの合同平和集会の模様、そして、真珠湾攻撃後に日系人らを拘禁した砂漠の収容所や墓道を彼らが訪れる様子を写し出す。真珠湾攻撃後と9.11後の2つの新聞記事に2人の大統領の演説の声と攻撃の瞬間の画像が重なる冒頭の映像をはじめ、スチール写真と動画、声や音楽が効果的に組み合わせられている。たった25分とは思えぬほど中身が濃く、ぐっと引き込まれる。

監督のリナ・ホシノ氏は、1968年、日本人の父と台湾人の母の下、米国に生まれる。仏・日・米で暮らし、現在



サンフランシスコ在住のデザイナー・映像作家。監督のバックグラウンドもそうだが、本作品に出てくる人々は、それぞれに複雑なルーツをもつ。

「私はここ(米国)を故郷とみなしている」というパレスチナ男性は、「でも、いつも差別や偏見の壁にぶち当たる」と訴える。日本人の母、元パレスチナ人の父をもつブルカを被った女性は、「子どもの頃からアメリカは自由で平等だと教えられてきたが、現実はずう」と言う。米国生まれの日系人女性は、米国も日本も「誇りに思ったことはない」と言い切る。ヨルダンで生まれ、12歳から12年間チュニジアで暮らし、その後米国に移った男性は「自分には故郷というものがないように思う」と語る。難民だった男性は、米国市民になって「初めて追われることなく生きていけると思っていたのに」と話す。これがこの多民族国家の実態なのだ。彼らは皆、米国市民だが、一体どこを故郷と呼べばいいのか。

ラストで日系人女性が言う。「自分は何者かと聞かれたら、もっと公平で調和のとれた世界を望む、ただの人間(just a human being)と答える」と。その言葉にハッとする。民族のアイデンティティも重要かもしれないが、それ以前に、多種多様な人々をただ「人間」として受け止めれば、世界で起きている不幸な攻撃や差別は起こらないはずなのにと気付かされて。(S)